

小堀 聡 著  
▶京急沿線の近現代史  
12・25判 A5判176頁 本体1800円  
クロスカルチャー出版



# 日本の戦前から戦後、そして現在という 難所を象徴的に表わしている

“京浜”は東京と横浜を連結した言葉であるとともに、工業地帯の形成とも密接に関連していた

## 室沢 毅

品川(厳密にいえば泉岳寺)から三浦半島へ走行する路線の京浜急行は、わたしが上京して五十年以上経つが、他の私鉄ほど利用したことがなく、たぶん一桁の回数かもしれない。それでも、印象深い沿線であることは確かだ。本書によれば、京浜急行電鉄の創業は、一八九九(明治三二)年、大師電気鉄道株式会社として発足し、「川崎(のち六郷橋)―大師」間で開業したという。現在の京浜川崎―小島新田間の大師線が京急の始まりだったということになる。大師駅は、川崎大師(平間寺)の参拝客を意識して敷設されたものだ。現在、初詣客の人数が常に全国で上位に位置している川崎大師にわたしては参拝したことはないが、初めて川崎市を訪れたのは川崎競馬場に友人の車で行った時だった。川崎市はわたしにとって、小中学生時に憧憬感を抱いた場所だ。最初は、ファンになったプロ野球の大

洋水エールズの本拠地が川崎球場(現・富士通スタジアム川崎)だったことで、地図を見る習慣のない小学生にとって川崎は幻の都市だった。中学生になって、坂本九のフアンになる。彼の生地が川崎市だったことを知ると、さらに川崎は親近なる場所となった。しかし、地図で幻の都市・川崎を俯瞰してみると、川崎から鶴見にいたる海岸側が大規模な埋立地になっていることに、東京から遠く離れた地方に在住するものにとって不思議な感覚に陥ったものだった。

「京浜」は、東京と横浜を連結した言葉であるとともに、つぎのようなことを意味する。「京浜電鉄の大半は、『京浜遊覧案内』当時、都市を走っていない。沿線が都市の名目を備えるのは第一次世界大戦(一九一四―一六)や関東大震災(一九二三)を挟んだ二〇年代半ば以降のことであり、これは京浜臨海部の工業化、すなわち京浜工業地帯の形成と密接に関連したものだ。」

一九一〇年に発行された『京浜遊覧案内』には、大森から鶴見に至る場所は、梅や桃、梨の花が咲き、海水浴場もあり、池上、羽田(飛行場が開港されたのは、三二年八月)、森ヶ崎の鉱泉浴、大森の砂風呂がある行楽地として、大自然に恵まれた場所であることが強調されていたのだ。

「工業化によって京浜間の行楽地が停滞・衰退すると同時に、周辺部が新たな行楽地や住宅地として開発されていく(略)京急が見出したのが三浦半島でした。」

京急が本格的に半島縦断(大規模宅地開発)へ向かうのは四八年以降になる。著者は、その中でも、「一連の宅地開発で最も、模範的に発展した駅が上大岡」だと述べている。「広い敷地を確保できたことで、戦後を通じて駅の拡張(引用者註・六三年駅ビル完成)が可能となった」からだ。現在、一日の乗降客数は、横浜、品川、泉岳寺に次いで四位に位置する。

戦後も、臨海工業地帯として根岸湾開発が進行していた。さらなる工業化と宅地開発は、自然破壊という環境問題を否が応でも表面化させていく。革新市政として知られた飛鳥田一雄の横浜市長時代でも、それを止めることほどできなかった。「根岸湾の公害は鶴見・川崎といった戦前来の工業地帯とは異なり、「かなり抑制され」たが、「横浜の自然海岸をほぼ消滅させた人物でもある」と著者は指摘する。人工島の八景島はいまでは観光スポットとして人気はあるが、飛鳥田市政時に作られたものだ。

さて、わたしにとって京急沿線で、川崎以上に拘泥している場所がある。それは、横須賀だ。

「横須賀から汐入り 追浜 金沢八景/金沢文庫/汐風の中 走ってゆくの/赤い電車は白い線/駅の名前をソラで言えるの/横須賀マンボ・Tシャネル/I came from 横須賀/あなたに会いに来た 岡 井土ヶ谷 日ノ出町/横浜まで/窓を開ければ 緑が 飛ぶの/快速特急 音をたてる(略)」

七六年六月、「横須賀ストリー」(作詞・阿木燿子、作曲・宇崎竜童)で歌手として鮮烈に飛翔した山口百恵は、翌年五月、全曲、阿木・宇崎コンビで作られたオリジナルアルバム『百恵白書』を発表する。その巻頭曲「I CAME FROM 横須賀」は、京急の「駅の名前をソラで言えるの」と百恵に歌わせられた。渋谷生まれだが、横須賀市には小学二年生から中学の途中まで、山口百恵は住んでいた。この歌は、ある意味、光彩があるように感じるかもしれないが、山口百恵の出自と母子家庭のように暮らしかなかった陰影のほうが、大きい。それはまるで、原子力研究所(現・日本原子力研究開発機構)の誘致を試みたり、米軍の原潜寄港の母港であり続けている軍港都市・横須賀と見事にリンクしているというべきかもしれない。横須賀は、「米軍と自衛隊との一体化は一層進展しています。基地の観光資源化の効果は、米軍にとって上々のものだ」と著者は述べていく。

京浜急行の「近現代史」は、この国の戦前から戦後、そして現在という難所を象徴的に表わしていると、本書を読み終えて、わたしが率直に感受したところだ。

(社会批評)